

「オネエ所長の調査ファイル」 # 9

山崎浩治

1

「いやっ、トオルちゃん！ エロい目で、あたしを見ないで！」

「見ちゃいけないと思っても、つい目がいってしまうんですよ！」

「そんなにあたし、魅力的？」

「女装したおっさんがビキニの水着、着てたら誰だって見るでしょ！ さっき行った浜茶屋のお客さんたちは2度見、いや3度見、いや4度見5度見してましたよ！ 見られるのが嫌なら、そんな不気味な格好やめてください！」

「女はね、見られることで美しくなっていくものなのよ」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透がやってきたのは週末の内灘海水浴場である。家族連れやカップルが楽しそうに戯れる波打ち際で、カラフルなパラソルの下の市山がゼブラ柄のビキニ水着姿で寝そべっている。金沢市の会社員・美幸(34歳)から「夫が家に帰ってこない。よそに女がいるのではないか」と相談を受け、夫・和也(32歳)を張り込み中なのだった。

結婚5年目の依頼人夫婦が美幸の実家から援助を受けて金沢市郊外にマイホームを建てたのが2年前、保育園に通う4歳の娘がいる。地元中堅会社の営業マン、和也はもともと帰宅が遅かったものの、3カ月ほど前から急に家に帰らなくなった。しかし会社には何食わぬ顔で出勤しているという。

平日の夜に残業を終えた和也を尾行すると、会社から市内のサウナへ直行し、仮眠室で泊まる生活を続けていた。しかし、この日は前夜泊まったサウナから自家用車で海水浴場に向かったのだ。

「海で女と会うつもりですよ、所長！」

人だかりから離れた浜辺で所在なげに佇む和也を窺いながら透が意気込んだが、日が暮れても女は現れなかった。

「もしかして相手は人妻かもしれませんね。デートの約束をしたものの、相手の女はなんらかの事情があって家から出られず、ダンナは待ちぼうけを食らわされた、とか」

空振りに終わった調査に疲れた様子 of 透に、市山が言った。

「それなら相手の女がメールで連絡してくるはずよ。何も一日中、海にいる必要はないわ」

「……ですよ」と透が肩を落とした。

2

「ご主人を1週間調査したけれど、泊まっているのはサウナかネットカフェ。女の存在は確認できなかったわ」

「金沢プライベート・リサーチ」を訪れた依頼人に、市山が途中経過を報告すると、美幸が「そんなはずはありません！ 絶対に女がいるはずですよ」と語気を荒げた。

「そう確信する根拠は何？」

「いままで休日は家でゴロゴロしてた人なのに、今年に入って急に休日出勤が増えたんです。平日、家に帰る時間だって、以前に比べてずっと遅くなっていたし……」

「決定的な証拠とは言えないわね」

「私たち夫婦は結婚してから一度もケンカしたことがありません。夫が家に帰ってこない理由がないんですよ。女ができたからに決まっているじゃありませんか！」

「それで、あなたはご主人に女がいたら、離婚するつもりなの？」

「もちろんです！ 夫と愛人には精神的苦痛の慰謝料として、損害賠償を請求します！」

怒り心頭の様子でオフィスを立ち去る美幸を見送った市山が透に指示した。

「依頼人の夫は仕事の合間に女と会っている可能性もあるわ。トオルちゃん、外回りの時も尾行してみてください」

それでも女の影は浮かんではこなかった。調査に行き詰まった平日のある夜、仕事を終えた和也が車で大型スーパーに寄って食料品を買い込み、人気のない海岸へ向かう。

「今日はサウナやネットカフェに行かないんですね」

尾行車のハンドルを握る透の傍らで市山が首を傾げる。

「彼は毎月、生活費を奥さんに送ってる。給料日は間近だし、お金が続かないのかも」

やがて海岸線に車を停めた和也が車内からカセットコンロを取り出して、浜辺でインスタントラーメンを作り出す。

「まさか、ここで車中泊するつもりじゃないでしょうね！」

素っ頓狂な声を上げる透に、市山が言った。

「これではっきりしたわ……彼は家も家族もあるホームレスだったのよ」

3

美幸とはSNSの音楽コミュニティサイトで出会い、メッセージのやりとりをするうち意気投合、オフ会でも会うようになった。結婚を決めたのは彼女が経理担当の正社員として勤務先の社長から信頼も厚いという、しっかり者だったからだ。次男坊として気楽に育ち、のんびり屋の自分にはリードしてくれる姉さん女房が最適だと考えたのだ。

ところが結婚してみると、美幸は想像した以上に何事も自分の思い通りにしないと気が済まない性格だった。「子供が小学校に入学する前に家を建てたいの。うちの実家が援助してくれるけど、私たちも3年で300万円貯めて頭金にするから、カズちゃんのお小遣いは月3万円で我慢して」「私も仕事してるんだから、家事は分担しましょう。食後の皿洗いはカズちゃんの担当よ」「子供の前で夫婦ゲンカは絶対にNG」「残業は仕方ないけど、会社の人と飲みに行くのは極力控えて」「年1回は家族旅行に連れて行ってね」などと和也の行動をいちいち指図した。マイホームを建ててからは営業成績まで聞きたがるようになり、セールスの方法まで口を出してくる始末だった。

会社で厳しいノルマを課せられ、取引先の無茶な要求に応え、へとへとになって帰ってきた家

にも妻という「上司」が待つ生活には心底へきえきした。結婚当初は反論を試みたものの、美幸が口にするのは常に正論で、和也は黙り込むしかなかった。息が詰まる毎日にうんざりして仕事が終わっても家に帰らず、サウナやネットカフェで時間をつぶして美幸が寝静まったのを見計らって帰宅することが増えていく。やがて深夜に帰宅するのも面倒になってますます家が遠くなり、帰宅するタイミングを完全に逸してしまった。

その日、どこで寝るかは懐次第だ。金に余裕があるうちはサウナなどで過ごし、給料日が近くなると車で寝泊まりした。スーツはまめにクリーニングに出し、コインランドリーにも頻繁に通って清潔を心掛けていたから、会社の誰にも家に帰っていないことは気付かれなかった。携帯電話さえあれば家があるがなかり、仕事には案外、支障がないものなのだ。

とはいえ、放り出してきた幼い娘には申し訳ない気がした。真夏の週末、時間を持て余して海水浴場へふらりと出かけ、子供連れの家族を眺めていたら、まぶたの裏が熱くなった。いまごろ家にいれば、娘を海に連れてこれたのに、と悔やむ。ホームレス同然の生活はそろそろ3カ月。これからどうしたらいいのだろう、と和也は頭を抱えた。

4

「法律には、夫婦の同居義務が定められていますよね。仮に女がいなかったにせよ、夫はその義務を放棄し、私と娘を遺棄しました。やっぱり、離婚するしかありません」

「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで、市山から報告を受けた美幸が切り口上で答えた。

「だけど、ご主人は手取り20数万円の給料から毎月15万円をあなたに送金してる。一概に「悪意の遺棄」とは言えないと思うけど」

「……じゃ、夫はなぜ家に帰ってこないんです？」

「ご主人は言ってたわ。あのまま家にいると、いつかあなたと正面衝突してしまう、って。あなたは彼に約束させたそうね。子供の前では絶対にケンカをしないと」

「私の両親は、私の前では決してケンカする姿を見せませんでした。親とは本来、そうあるべきものです」

「そうかしら。どんなに仲がよくても、夫婦はケンカするものよ。むしろ、犬も食わないようなケンカをどんどんすればいいのよ。けどケンカしたら、必ず仲直りすること。子供は仲直りする両親を見ることで、謝る勇気や相手を許す優しさを学んだから」

「私は間違ったことなんて言ってませんよ」

美幸が不満そうに口をとがらす。

「夫婦に正論は要らないの。正論で責め立ててばかりいると相手は逃げ場をなくすわ。今回のご主人の家出だって夫婦関係を守るための「緊急避難」だったんじゃないかしら。そうそう、報告が遅れたけど調査の途中、ご主人の周囲に若い女の影を見つけたわよ」

「ほら、やっぱり！」

腰を浮かせた美幸を手で制した市山が続けた。

「彼は忙しい外回りの合間をぬって、保育園にいる娘さんの様子をこっそり見に行ってたのよ。家に一番帰りたいたいと願っているのは、ご主人自身だと思うわ。大切なのは、ご主人をどう変えるか、ではなく、あなた自身がどう変わるか、じゃなくて？」

5

それからしばらくして和也は自宅に帰った。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスにいる市山に、美幸から「犬も食わない夫婦ゲンカをするようになりました」というメールが届いたのは、朝晩にめっきり秋の気配が深まったころだった。市山が美幸のメールを透に見せて言った。

「`家や家族もあるのにホームレス、という人は`帰宅拒否症、とか言われて、以前から存在したのよ。ただ、一昔前は家庭を顧みず、仕事に熱中したあまり、家庭に居場所を失った人が多かったけれど、いまは今回の夫のように奥さんからのプレッシャーで追い詰められて`家庭難民化、するケースが多いようね」

「あの夫婦、これからうまくいきますかね」

「お互い、できることをできる分だけやる。できなかった相手に文句を言わない。それが夫婦としてうまくやる秘訣よ。いいじゃないの、夫婦だもの」

「相田みつをみたいに言わないでください」

「どのみち、完璧な人間はいないのよ。あたしだっていわば、`不完全な女、」

「所長の場合、不完全にもほどがありますけどね！」

数カ月後、市山と透が依頼人の様子を見に赴くと、親子は家族連れでにぎわう自然公園へピクニックに出かけていた。市山はタンクトップに下着が見えそうなミニスカートというファッション。ネコ目ふうのアイメイクで本人は小悪魔を気取ったつもりだろうが、小悪魔というより悪魔そのものの外見だった。

芝生にシートを敷き、ランチボックスを中心にして車座に座る依頼人親子が何やら熱心に語り合っている。散歩を装って会話を盗み聞きしてきた透が市山に報告した。

「お弁当の卵焼きは甘いのがいいか、しょっぱいのがいいかで議論していましたよ。ちなみに`甘いのがいい、は娘とパパ、`しょっぱい派、のママは劣勢でした。これも`犬も食わない、ヤツですかね」

苦笑した市山が答えた。

「卵って夫婦に似てるよね。別々に生きてきた男女が家庭を作ったように、黄身と白身という全然違うものが一つの殻のなかに入ってる。二つをほどよくかき混ぜて、ふっくら焼き上げれば、おいしい卵焼きになるわ。子供が卵焼きを好むのは、それが仲のよい両親の象徴だからよ」

したり顔で話す市山を3歳ぐらいの男の子が泣きべそをかく寸前の表情で見上げている。そこへ血相を変えた母親が駆けてきて「ター君、見ちゃダメ！ 夜オネショするから！」と男の子を抱き上げ、その場を走り去る。「あら、失礼ね」と市山が回れ右して歩き出した。